

第 11 回全国合気道指導者研修会



金澤講師による基本動作や技の指導法

第 11 回全国合気道指導者研修会（主催＝日本武道館、合気会、後援＝スポーツ庁）が 11 月 3 日～5 日の 3 日間、千葉県・勝浦市の日本武道館研修センターにて参加者 52 名が集まり実施された。

本研修会は、全国の中学、高校の教員及び社会体育指導者を対象に、学校における合気道指導の充実を目的として実施された。

1 日目（11 月 3 日）

開講式では、はじめに植芝守央合気会理事長が「今回の研修会で合気道に、初めて触れる先生方もいらっしゃるかと思います。合気道を深く理解していただき、中学校の体育授業の中でますます輪を広げていってほしいと思います。」

また、全国の連盟代表者の方々には学校側から要請があった場合、速やかに対応できるよう指導のノウハウをしっかりと理解していただきたいと思ひます」と挨拶した。

続けて、和田健日本武道館振興課長が「中学校武道必修化から 11 年が経ちました。合気道を教材として学校の先生方が指導しやすく、合気道の教育力・特性を活かして、子どもたちに何をどう伝えることができるか試行錯誤して現在に至っております。今回はそのエッセンスが詰まった研修会です。是非、実りあるものにしていただきたいと思ひます」と挨拶を述べた。

開講式後、合気道の歴史、概要を映像と資料で紹介した後、本来の稽古の様子を示す目的で基本動作や技法の稽古を全員で行った。植芝充央講師

は半身をしっかり作る、体さばきをしっかり行うなど、1 つ 1 つの動きを丁寧に正確にすることを心がけて基本的な動きを大切にしながら稽古をするよう指導した。また、「合気道のバトンを受け継いでいくことが未来につながる。指導者の皆様は受け継いだことを次世代に渡していくことを意識してほしい」と呼びかけた。

続けて、中学校における合気道授業を想定し、基本動作や技の指導法を行った。金澤威講師は「合気道には試合がない。相手を感じながらお互いに動くことで調和や和合、協調性が生まれる。授業で合気道を学ぶ意義とは、合気道の技を通じて相手を感じ、思いやる心を育てていくことではないか」と説いた。「学校現場で指導を行う参加者は子ども一人ひとりをしっかり見ながら、少しでも『合気道をやってよかった』と子どもたちに感じてもらえるよう、頭と体を使ってその方法を模索してほしい」と結び、実技指導が終了した。

その後、連盟代表者（学校合気道授業映像観賞）と教員（学校授業指導法オリエンテーション）の 2 班に分かれて講義を行った。学校授業指導法のオリエンテーションでは、冒頭、梅津翔助講師が、「研修会終了後に参加者が合気道の授業を展開できるようにする」という講師陣の目標を伝えた。その後、1 人ずつ指導上の悩みや今回の研修会で学びたいことを全員で共有した。参加者からは「授業で合気道を実施するにあたり、ゴールをどこに設定するか」「障がいを持つ生徒にいかに授業を楽しんでもらうか」など様々な意見が述べら

れた。日野^{ひの}皓正^{てるまさ}講師は「今回の研修会では、ただ合気道の技術を学ぶだけでなく指導に還元し、体育の授業で合気道を教材として何を生徒に学ばせたいのか、何を共有していきたいかを皆さんに考えてほしい」と述べた。

2日目 (11月4日)

2日目も引き続き2班に分かれて研修を行った。連盟代表者班では尾崎^{おざき}响^{しやう}講師進行のもと「学校要請に応えられる指導者の育成」をテーマに各班に分かれてブレインストーミングを行った。参加者は各県の情報や課題を共有しながら求められる指導者像や、解決策等自由に話し合い、情報交換、発表を行った。

発表を受け、金澤講師は「改めて、道場側に立つ指導者と学校側の教師が求めているものが違うことが分かった。私たち指導者は学校側の意見をしっかり聞きながら良いものを提供できる準備をしなければならないと大いに感じた。今後もより良い合気道授業が行われるよう努力をしてまいりたいと思います」と感想を述べた。

同時刻、教員班では中学校合気道指導法として日野講師、梅津助講師指導のもと、後ろ受身、角落し、小手返し、座技呼吸法、四方投げ(裏)、小手返しの発展の指導を行った。



中学校合気道指導法①・②

休憩を挟み、園部^{そのべ}豊^{ゆたか}講師による「スポーツ心理学から見る運動指導のつかみどころ」の講義を行い、園部講師は、本講義の目的として「チャレンジする行動を導き出す方法を1つ挙げることができる」「コミュニケーションスキルについて指導者自身の強みと課題が明確になること」の2つを挙げた。

講義では、心理的に安全な状況下で新しい指導スキルを身に付けるために、少人数で実施する実践的なトレーニングである「マイクロコーチング」の紹介・実践を行った。参加者は少人数でグループを作り、教師役と生徒役、記録者の役割に分かれた。そして、教師役が3分以内に生徒役に実践

方法(指笛の吹き方やペン回しの方法、手品など教える内容は教師役が自由に決定)を指導した。参加者たちは、何を教えるかではなくTPOを上手く見極めながら、主体的な学びを促すアプローチである「指示」と「質問」を使い分け、どのように教えるかを意識しながら実践とディスカッションを行った。

マイクロコーチングの実践後の感想として参加者から「質問されて初めて気付くことがあり、学ぶことが多かった」「実際の指導の現場では、指示ばかりになってしまい、質問や提案ができていないことに改めて気付かされた」「指導者が楽しみながら教えるものに生徒は惹きこまれると感じた」等の意見が挙げられた。



マイクロコーチングの様子

2日目の最後には、佐藤^{さとう}貴^{たかし}講師、日野講師、中村^{なかむら}仁美助^{ひとみすけ}講師、参加者の岡本^{おかもと}大生^{おたいせい}氏が体育教員、外部指導者、ティームティーチングの3つのパターンを想定した模擬授業を行った。

3日目 (11月5日)

最終日は、林^{はやし}典夫^{のぶお}講師進行のもと、過去に本研修会に参加した教員が実践した授業の事例や、学校で合気道授業を実施した経験がある参加者の事例報告を行った。

実際に中学校の体育授業で合気道を実践したことで「生徒から『当初武道は痛くて怖いという印象があったが、丁寧に教えてもらうことで技ができるようになってうれしかった』『相手を尊重することを学び、普段の生活にも活かすことができるようになった』との感想があった」「はじめのオリエンテーションで合気道は試合がない武道であり、大切なことは勝ち負けではないと説明したことによって生徒同士がお互いに得手・不得手をカバーしあうような雰囲気は授業内ででき上がった」といった感想の紹介があった。

閉講式では、林合気会常務理事、和田振興課長がそれぞれ主催者挨拶を行い、全日程を終了した。